

経営者が選んだ

名言

Impressive Words

自分が置かれている環境をいったん肯定し、人の縁によって現在の自分がある、つまり生かされていることを自覚する。同時に、人類究極の目的に向かつて、状況に応じ「生かされながら生きる」。これが私の考える「中庸」である。

私は四〇代になって、この言葉を強く意識するようになった。

いまある私は、たくさんの方々との出会いと縁の賜物であり、感謝にたえない。一方、ゼロから事業を立ち上げてきた歩みは、既得権と因習の壁を臨機応変に突破していく戦いの連続であった。その人生の途上において、いかに生きるべきかを模索するなかから、「天寿が全うでき、人々が楽しくゆかいに生きられる、継続可能な社会の創造」が人類究極の目的であると見いだした。

一個人と同様、人類の歴史もまた人の出会いに満ちている。反面、天寿を全う

できる社会の創造を目指す過程で、飢餓と戦争という非人間的な状況が繰り返されてきたのも事実である。

しかし、いまや先進国をはじめ世界は、科学技術の急速な進歩によって、飢えと殺戮の恐怖から解放されようとしており、人類究極の目的を追求できる環境が整いつつある。目的を具現化するための目標を定め、行動を起こすべきときにきている。

未来のためのあらゆる施策は、人間回復を目指し利己から利他への進化を促すものでなければならぬ。このパラダイムシフトに失敗すれば文明は崩壊する。

私は、出雲における「人と縁の感謝・戦争の歴史記念館」「未来を拓く研究所」の建設構想を中心とする三大プロジェクトを通じてパラダイムシフトを進めたいと考えている。これは「中庸」の思想から生まれたものである。

中庸

偏らざるをこれ中といい、易わらざるをこれ庸という

小松電機産業(株)社長

小松 昭夫

